

「歎異抄の世界と現代」(1)

松田 正典

1. 『歎異抄』について

○ 著者、唯円の歎異の精神

『歎異抄』の著者とされる唯円は、常陸国河和田（現在の水戸市河和田町）の報仏寺の開基。一説に西暦1222年から1289年の人。稲田において聖人に帰したと伝えられる。聖人御入滅の年、41歳。関東より聖人御在住の京都まで「十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめ」たまいし時は、30代半ばであったことになる。そして、「なくなくふでをそめてこれをするす」べく歎異抄を著されたのは、聖人御入滅の年より二十余年の後。聖人と唯円とのこのような年齢差での出遇として『歎異抄』を紐解くとき、青年唯円の出遇いの感動と、晩年の唯円の「歎異の精神」（真実の教えに異なることを嘆く心）が身近に感ぜられる。

曾我量深は「真宗再興の精神、これは歎異の精神である。信心異なることを歎く精神、だれが異なるか、自分が異なっている。編者の唯円も異なりは自分にあると痛感していたとわたしは思う」（『歎異抄聴記』東本願寺出版）と語る。「異なりは自分にある」という言葉に現代の闇と救いの読明へのヒントがある。



写真：親鸞聖人が20年近く在住された稲田の草庵の山門（笠間市稲田）（世界採集写真館提供）

○ 著述の時代背景—鎌倉仏教と日本の近代化

司馬遼太郎は「日本の近代化は鎌倉時代に遡る」とする。その理由として、武家が台頭することによって、庶民が土地を所有するようになった。所有地の維持管理を通して、庶民が自らの力量を客観的に評価する能力、「リアリズム」の能力を身につけたことを挙げる。この時代にこの「近代化」が起きていなかったなら、19世紀、わが国は欧米列強の植民地になることを免れえなかったであろうという。

仏教伝来から600年あまりを経たこの時代、大きな変革が生じた。わが国の仏教に「国家の宗教」から「個としての救いの宗教」へのコペルニクスの転回が、法然（1133-1212）によって引き起こされた。それが、栄西（1141-1215）、親鸞（1173-1262）、道元（1200-1253）、日蓮（1222-1282）、一遍（1239-1289）に代表される鎌倉新仏教の起点となった。この歴史的転回を亀井勝一郎は「宗教改革の道の始まり」とよび、法然によって『選択本願念仏集』が著された1198年とする。この書による宗教改革とは、「六百年にわたる伽藍仏教の否定」であり、「奈良六宗をはじめ比叡高野における学僧秀才による仏教の否定」であり、持戒持律の適わぬ「救われ難い存在としての凡夫の自覚」道としての仏教への立脚であるとする。（亀井勝一郎『日本人の精神史』講談社）

13世紀のわが国は政治経済の基盤のみならず価値観そのものの激動の時代であり、現代に通ずる「パラダイム・シフト」の悲劇の時代であった。と同時に、新たな価値の創生の時代であった。

○ 歎異抄に問われる「異義」とその根

『歎異抄』は、前序、顕正編九章、中序、異義編八章、後序から構成されている。前序は著作の縁由が記され、顕正編は晩年（83歳頃）の親鸞の仰せの聞き書きになっており、師訓編ともよばれる。中序は顕正編の纏めと異義編の序文である。後序は全体の総結の文になっている。

異義編を読むと、どれをとっても現代人の迷妄と共通していることが解る。カルトの問題も出ている。しかし、人間の実存的悲劇に関わる問題については、藤秀環、広瀬杲、細川巖のご指摘に依ると、次の二つに分けられる。（松田正典『生きるための歎異抄』法蔵館・聞法ブックス）

1 観念派の異義 【知性中心主義】 → ニヒリズム症候群

2 賢善派の異義 【理性中心主義】 → うつ病症候群

【 】は異義の根、→は現象を表す。

2. 現代の悲劇とその根

○ メリトクラシーという問題 子供たちの様々な問題現象は、個々の家庭や学校教育の問題というよりも、社会状況の変化にその原因があると見られる。長い人類の歴史において、子供たちは母親の家事労働の分担者だった。家事労働を共にするところにおのずから家庭教育がなされていた。半世紀前からの家庭電化製品の普及によって、長い人類の習いの伝承が必要でなくなった。科学技術の発展が人類700万年の家庭教育の習慣を破壊したといえる。その結果、教育は「知性中心主義」に傾くこととなる。

英国のマイケル・ヤングは、「メリトクラシー（Meritocracy）」という造語を用いて、科学技術文明の特徴を表現した。メリットに支配された国家・社会という意味である。全てのものに「メリットか、デメリットか」という“ものさし”を当てて計る科学文明の本質を捉えた造語といっ

てよい。これは、後のサッチャー政権によるリストラ行政の特長ともなっている。（マイケル・ヤング『メリトクラシー』至誠堂）

一方、堀尾輝久（『現代社会と教育』岩波新書）はメリトクラシーについて次のように指摘する。メリトクラシーでは「社会全体が学校化され（中略）社会全体の過剰なほどの学校化は、学童にとって、そこでの競争と序列づけに耐えねばならぬものとして、彼らの意識下の世界に、いわば強迫症的な心性を刻みこむ」ことになる。すなわちメリトクラシーは、子供たちにとって功利主義と能力主義の人格形成を意味する。マルティン・ブーバーの指摘する通り、この“Ich—Es”（私—それ）の関係性は「私」そのものを「それ」化（物質化、道具化）するのであり、“Ich—Du”（私—汝）の関係性が失われる。ここにニヒリズム症候群の根、知性中心主義がある。

また、メリトクラシーは世のため人のためという成果主義でもある。現代の理想主義は成果主義であり、全人類の志求するところとなっている。これを理性中心主義といい、うつ病症候群として現象すると見られる。

しかし、メリトクラシーは科学技術文明の本質であり、これを捨てることは不可能なのである。

3. 真実に生きるということ —生命倫理の根幹—

マイケル・ヤングの造語「メリトクラシー」の反対語として、「アマタクラシー（Amita-cracy）」という造語を提案したい。“mita”とはサンスクリットで「ものを計る」という意味である。“a”はそれを否定する接頭語。サンスクリットで“Amita”は「計ることのできない（無量）」という意味の言葉である。そして、科学技術に代表されるメリトクラシーという表層文化（カルチャー）と、いのちの計量を許さない深甚の精神文化・アマタクラシーという深層文化（カウンター・カルチャー）とは、背反と相補の関係にあるとする。メリトクラシーという表層文化をカルチャーと呼び、アマタクラシーという深層文化をカウンター・カルチャーと呼び、両者の背反と相補の関係が西田哲学の「場所的論理」（主体と基体の関係）といえる。（西田幾多郎全集第9巻『場所的論理と宗教的世界観』）

西田の「主体と基体の関係」の視座に生命倫理の根幹があり、その故に共生の哲学とも呼ばれる。そのルーツは、親鸞の『教行証文類』と『歎異抄』にある。メリトクラシーというカルチャー（表層文化）とアマタクラシーというカウンター・カルチャー（深層文化）との絶対矛盾的自己同一に真の自覚道があり、人としての真実の存在構造がある。これは親鸞の国土観「化身土と真仏土」の今日的表現である。アマタクラシーを見失ったメリトクラシーは地獄の沙汰であり、メリトクラシーを無視したアマタクラシーは観念の遊戯に過ぎないのである。

「地獄は一定すみかぞかし。弥陀の本願まことにぞおわします。」（『歎異抄』第2章）

「暗深くして光いよいよ輝き、業苦重くして大悲いよいよ深し。」住岡夜晃（『讚歎の詩』樹心社）

この深甚の思想を、19世紀末に石見に生きた下駄職人・浅原才市は鮮やかに詠う。

「慚愧、歡喜は法の宝で 世界国土がみな慚愧 世界国土がみな歡喜
慚愧、歡喜の なむあみだぶつ」と。

（藤秀翠『宗教詩人才市』法蔵館、鈴木大拙『妙好人』法蔵館）

この詩の英訳（大来尚順氏による）を、以下に記す。

“To be ashamed of one’s sins and to rejoice are the treasures of Dharma.
All the world is to be ashamed of one’s sins,

All the world is to rejoice,

To be ashamed of one's sins and rejoice in I take refuge in Amida Buddha.”

(注) 第2節と第3節については、オックスフォード大ジーザス・カレッジで開催されたオックスフォード円卓会議2008において、次の題で発表したものである。

Oxford Round Table 2008 “Religion—Politics of Peace and Conflict—”

“A Worldly View for Preventing Tragedies in Periods of Paradigm Shift

: Reviewing the Thoughts of Shan-tao and Kitarō Nishida”

ジャーナルへの寄稿論文は、すでに [web上](#) に公開されている。

(本稿は、平成22年10月19日にTSS文化大学で行った講演の概要である。)